

移民の若者の社会的排除——日系ブラジル人の場合

Social Exclusion of Immigrant Youth: The Case of a Japanese Brazilian

能勢桂介 (立命館大学)

Nose Keisuke (Ritsumeikan University)

【キーワード】 社会的排除、日系ブラジル人、マジョリティと移民の共通性と差異

1. 問題設定

移民の子どもたちの状況については教育社会学を中心に、中学校時点までの教育からの排除が制度、学校文化、教育支援、学力・進路形成、不就学など多面的な観点から相当程度、蓄積され、明らかにされてきた。中学卒業後の状況についても彼らの成長にともなって研究が少しずつ出始めている(志水編 2008)。しかし、外国人の子どもの高校在籍率は、国勢調査をもとにした研究で中国 75%、フィリピン 40~45%、ブラジル 30~35%(鍛冶 2011)と日本人に比べ著しく低いのが現状である。にもかかわらず、大半の移民の子ども(若者)の高校非進学・高校中退の過程やその後の状況は、十分に解明されているとは言い難い。こうした研究の遅れの背景には、移民の教育研究と若者の排除研究が別々におこなわれているという事情がある。

そこで本報告は二つの分野で別々におこなわれてきた研究の接合を試み、移民の若者のライフヒストリーから高校非進学・高校中退の過程とその後の状況に焦点を当て分析をおこなう。今回は、日系ブラジル人の若者を取り上げる(トランスナショナルなステップ・ファミリーの若者については能勢(2013)で取り上げた)。このことによって排除におけるマジョリティと移民の共通性と特殊性(移民特有の困難さ)を解明するとともに、多文化化と貧困という現実を不可視化し、不問に付してきた日本の教育、また教育と密接に関係する雇用と福祉の問題を照射していく。

2. 分析枠組み、及び調査概要

包摂/排除の要因を分析するためには、若者とその家族が有する学歴や経済などの諸資本や戦略とホスト社会の構造(移民政策、労働、教育・社会保障、ソーシャル・キャピタルと差別、イデオロギー)の相互作用によって引き起こされる過程を検討していく必要がある。そのためにはまずホスト社会の分析をおこなったうえで、移民や他の被排除グループとの共通性と特殊性を讀解していかなければならない。

日本における若者の社会的排除のマクロ的要因は、過去 20 年間、他の先進社会と同様に構造変動による長期不況や非正規労働者の増大などがあったにもかかわらず、男性正社員/女性主婦という家族をモデルとした「日本型社会保障」が維持されてきたことにある。そして若者の排除研究において若者が中卒・高校中退者に陥りやすいのは、経済的困難や離婚・再婚の家庭(あるいは双方の重複)が多いことが明らかになっている(部落解放・人権研究所編 2005)。よって、どの家族にも共通する排除リスクと移民特有の排除リスクの重層的・複合的な絡み合いを解明することが移民の若者の排除分析の焦点となる。

本報告では、1.5 世の若者(15 歳から 34 歳までのもので実の両親、子どもが外国生まれで、おおよそ 15 歳までに現居住国に移住)でブラジル人という同一条件にある若者を筆者調査から選んでライフヒストリー・インタビューを分析する。報告者は 2006 年 3 月から 2009

年12月まで、長野県X地域において対象の子ども・若者だけでなく、若者をよく知る同国人や市民活動関係者からのインタビューや参与観察などをおこなってきた。本報告では中卒・高校中退にとどまり、生活保護を受給し、排除状況にあると認定できる2人と排除状況にはないと認定できる3人とのライフストーリーの比較を中心に、他の調査データを参照し、排除の要因の分析を試みる。

3.考察

ブラジル人の家族生活は暫定的な定住意識のもと、セグリゲート化された社会保障なきブラジル人ハケン労働市場に生活の大部分が圍繞され、不安定である。それによって多くのブラジル人家族は、社会的排除研究でいう経済的困難や離婚・再婚の家庭（あるいは双方の重複）になりがちである。親が子育てに集中したくても長時間労働や日本語力・日本社会の知識不足のために子どもをサポート出来る状況にはない。このハンディは、移民のステップ・ファミリーの連れ子で義父が経済的支援や日本社会のガイドの役割を果たしている家庭と比較するとよく分かる。

高校進学へのチャンスは来日時期も相当程度、影響している。思春期来日は、時間的に日本語習得が難しく高校進学はかなり厳しいようだ。先に述べた移住状況に加えて、日本の学校側の受け入れ体制の不十分さ（日本語指導の不十分さ、親までに届く進路指導のなさ）によって、たとえ教師が進学を勧めても子どもたちは不利を直感し、自身の学力のなさからあきらめてしまう。早期来日組は概して高校進学に有利に働くように思える。親は日本滞在が長期化するにしたがって、子どもの日本でのキャリア形成を真剣に考えるようになるし、子どもにとっても日本語や日本社会の方が自然になってくるからだ。それでも、セミリンガル化し、学力不足や親の都合などによって進学しない者も多い。要するに、ブラジル人の子どもは高校進学においてあらゆる面でマイナスの条件を生きているのである。こうして多くの1.5世のブラジルの若者たちは、高校進学機会を逸してしまう。

そして、1.5世代は中学卒業の資格もあるかないか程度で、親と同じようにハケン会社で就労していく。日本語能力のない（あっても会話程度）の彼らからすれば、ブラジル人向けハケンで働くことは手っ取り早い就労ルートであり、事実上それしかないといえる。しかし、若者たちは日本で学歴が付けられなくても、ブラジル人の世界で暮らしている限り、親と同等の給料がもらえるので日本人フリーターのような自尊心の低下はない。日本の消費生活の豊かさによって階層の上昇感すらもち、早々と結婚していく。

しかしながら、劣悪なハケンという雇用環境において病気、解雇などが重なると貧困や社会的排除状況にすぐさま移行してしまう。リーマンショックはこのことをこれ以上のない仕方で示した。とはいえ、ブラジルに資産もなく学歴もない若者たちはブラジルに帰りたくても帰れる状況にはない。彼ら彼女らは日本社会からもブラジル社会からも排除されており、属すべき国がないのである。他方、地域からすれば人知れず地域に貧困が蓄積されていくという事態が起こっている。

だがこのような環境でも高校進学を果たし、排除を回避する若者がいる。排除されるものとそうでないものを分岐させるものは何か。大会当日、報告したい。

*派遣・請負の区分が労働者の多くはできないため本報告では一括して「ハケン」と表記する。

【参考文献】

部落解放・人権研究所編，2005，『排除される若者たち——フリーターと不平等の再生産』解放出版。

鍛冶到，2011，「外国人の子どもたちの進学問題——貧困の連鎖を断ち切るために」移住連
貧困プロジェクト編『日本で暮らす移住者の貧困』,38-46.

志水宏吉編，2008，『高校を生きるニューカマー——大阪府立高校にみる教育支援』明石書店。

能勢桂介，2013年3月刊行予定，「移民の若者の社会的排除——ステップ・ファミリーの場合」『生存学』生活書院,Vol.6.